

保母養成校の体育実技教材に関する研究(Ⅲ) 21世紀に向けた保育者の教材開発 「レクリエーション指導法」授業のもたらす効果

柳 沢 秋 孝*

Akitaka YANAGISAWA

古 屋 顕 一**

Kenichi FURUYA

[Ⅰ] 緒言

21世紀を数年後に控えた昨今、保母養成校のあり方についての変革が問われている。その中でも社会の構造的変化を背景とした専門職としての保育者に対する社会的要請の変化があげられ、このような変化に養成校としてどのように対応し、求められる社会的責任を果たしていくのかという点が問題になる。

更に、免許・資格に関わる養成校の教育制度的枠組みの変容も、現状においては明示されていないが、教育職員養成審議会・教育課程審議会はすでに活動を開始しており、児童福祉法の改正準備も進行中で保母養成校を取り巻く制度条件は大きく変容することが予想される。

このような動向から、これらの状況を踏まえ、保育をめぐる今日的課題に 대응する授業科目の新設、授業内容の革新、等のカリキュラム改革への努力は保母養成校において盛んに進められているのが現状であり、養成校が社会変化、保育ニーズの多様化を踏まえてどのような教育理念を掲げ、それをどのようにカリキュラムに具体化していけば良いのであろうか。

高等教育機関では、「学生ニーズに対応する授業改善・改革」が大学設置基準の大綱化をきっかけにセメスター制、シラバスの作成、学生による授業評価など盛んに実施されている。また、学生の多様化にともない、入学動機のあいまいな学生、主体制がなく指示待ちの学生を主体的に学習できるように生活態度を変化させ、学習意欲を高めさせるための授業方法なども検討しなければならない時期にきている。

このような現状から、学生ニーズの多様化に 대응するため授業形態も講義だけではなく、体験学習などを取り入れて学生の興味関心をひく試みも重要なファクターになると考えられる。本学の体育科においても教育方法の改善が検討され、主体制を引き出し、楽しく体験できる学習という観点からレクリエーション指導法の授業を一昨年前から導入した。内容は2泊3日のキャンプが主になるが、事前に大学内において2回の授業を展開してから実施した。

そこで本研究は、このレクリエーション指導法が、保母養成校の授業として学生ニーズの多様化に応えられるものであるのか、21世紀に向けた保育者養成の教材開発につながるのかを検討したので、この結果について報告する。

* 松本短期大学幼児教育科

** 信州大学経済学部

表1. アンケート調査用紙

2 1 世紀に向けた保育者の教材開発

「レクリエーション指導法」授業のもたらす効果

レクリエーション指導法のアンケート調査

H9.5.26

適当と思う数字に一つだけ○を付けて下さい。

[5…当てはまる、 3…どちらでもない、 1…あてはまらない、]

★今年の春休み中に保育園実習を終了した 5 1

★貴方は幼児期をどこの地域で過ごしましたか？（例…松本市）（ ）

1. 過去における「遊び」の傾向

- ①自分の幼少の頃の遊びは室内よりも野外で沢山遊んだ 1) 5 4 3 2 1
- ②幼少の頃、今回のような野山で遊んだ経験がある 2) 5 4 3 2 1
- ③今回の活動を行ってみて、なつかしさを感じた 3) 5 4 3 2 1
- ④幼少の頃に川や河原で水遊びでをした経験がある 4) 5 4 3 2 1
- ⑤幼少の頃、ファミコンやテレビゲームであまり遊ばなかった 5) 5 4 3 2 1

2. 現在における「遊び」の傾向

- ⑥最近、キャンプで一泊以上した経験がある 1) 5 4 3 2 1
- ⑦最近、自然の中でのびのびと遊んだことがある 2) 5 4 3 2 1
- ⑧自然の草花、虫などの名称をほぼ理解している 3) 5 4 3 2 1
- ⑨現在はどちらかというとも野外で活動する事が多い 4) 5 4 3 2 1
- ⑩現在、ファミコンやテレビゲームで遊ぶのには興味がない 5) 5 4 3 2 1

3. 授業そのものについて

- ⑪今回の授業は楽しかった 1) 5 4 3 2 1
- ⑫自然の中での活動で心身のリフレッシュができた 2) 5 4 3 2 1
- ⑬このような授業はこれからの幼児教育者に必要である 3) 5 4 3 2 1
- ⑭来年もこの授業は行ったほうが良い 4) 5 4 3 2 1
- ⑮このような機会があったら、また参加してみたい 5) 5 4 3 2 1

4. 授業内容について

- ⑯野外活動の楽しみ方が理解できた 1) 5 4 3 2 1
- ⑰人と楽しく「遊ぶ」という難しさが理解できた 2) 5 4 3 2 1
- ⑱以前より遊び心が身についたような気がする 3) 5 4 3 2 1
- ⑲授業前と比べると「遊び」の捉え方に変化が見られた 4) 5 4 3 2 1
- ⑳自然に対しての知識をもっと勉強したい 5) 5 4 3 2 1

[II] 調査方法

1. 調査対象および人員

調査対象は松本短期大学幼児教育学科2年生(平成9年前期の体育実技におけるレクリエーション指導法授業24時間、12コマ受講した学生)女子63名・男子3名の合計66名である。

2. 調査期間と方法

大学内における授業を平成9年4月に2コマ(キャンプ出発前の事前授業)行い、平成9年5月8日～10日(2泊3日)にかけ10コマのキャンプ実習を、長野県高遠町、「国立信州高遠少年自然の家」で行った。その後、5月26日、1・2時限目の体育実技授業でアンケート用紙を配布し記入後回収した。

3. 調査用紙および調査項目

調査用紙および調査項目を表1に示した。

4. 評価方法

野外活動における経験と今回実施した授業に対する思考の観点を4側面からとらえ、これをリッカート法の簡略方式²⁾によって処理した。内容は以下の通りである。

(1)過去における「遊び」の傾向。(2)現在における「遊び」の傾向。(3)授業そのものについて。(4)授業内容について、の4カテゴリーで、各カテゴリーには5項目の問いが示され、反応態度を「あてはまる」5点・「ややあてはまる」4点・「どちらでもない」3点・「あまりあてはまらない」2点・「あてはまらない」1点の、五段階にそれぞれ配点し、評価した。

(5点・最も積極的態度を示す←————→最も消極的態度を示す・1点)

[III] 調査結果と考察

調査結果は1.全体を通して、2.都市部出身者と農村部出身者の比較、3.教育実習終了者と未終了者の比較、を調査項目に従って検討した。

1. 全体を通して

図1は各項目ごとに総点を求め、この平均値をグラフに表したものである。

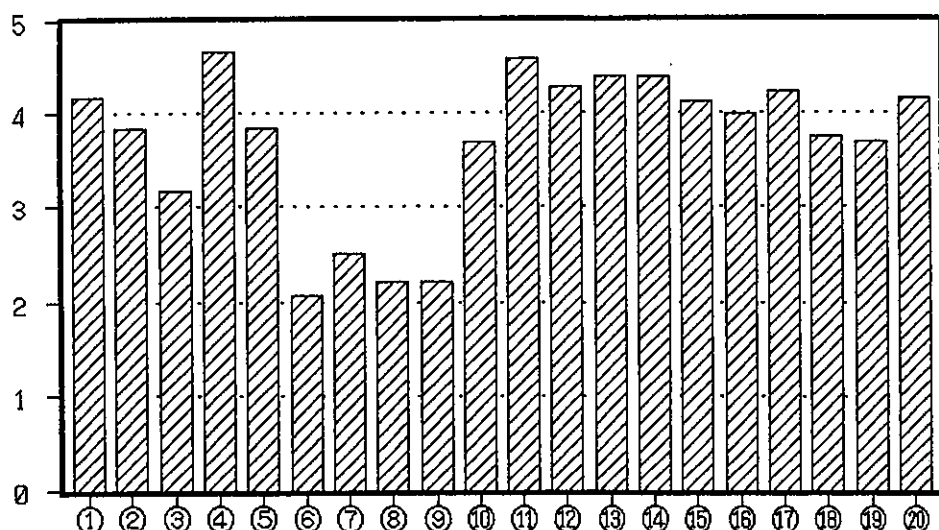
これを各カテゴリー別に考察してみる。

1) 過去における「遊び」の傾向

被験者の殆どが現在19・20歳で、昭和52・53年に出生した学生であり、幼児期・児童期を昭和55年から62年に過ごしている。この時期はファミコン・テレビゲームなどの遊具が出回り始めた時期であるので、どのようにこれが影響しているか興味深い。

最高値を示したのは、④「河原などで水遊びをした経験がある」4.7点、次いで①「室内より野外で沢山遊んだ」4.2点である。この数値からは自然に親しむ遊びを多く行ってきたように思われるが、③「今回のキャンプでなつかしさを感じた」では3.2点と最も低い値を示している。このことから考えられることは、自然に親しむ遊びは行ってはいるがこ

図1. 全体を通して



1. 過去における「遊び」の傾向

- ①幼少の頃は室内よりも野外で沢山遊んだ
- ②幼少の頃、野山で遊んだ経験がある
- ③今回の活動で、なつかしさを感じた
- ④幼少の頃川や河原で遊んだ経験がある
- ⑤幼少の頃、ファミコンなどであまり遊ばなかった

3. 授業そのものについて

- ⑪今回の授業は楽しかった
- ⑫今回の授業で心身のリフレッシュができた
- ⑬この授業はこれからの幼児教育者に必要である
- ⑭来年もこの授業は行ったほうが良い
- ⑮このような機会があったら、参加してみたい

2. 現在における「遊び」の傾向

- ⑥最近、キャンプで一泊以上した経験がある
- ⑦自然の中でのびのびと遊んだことがある
- ⑧草花、虫などの名称をほぼ理解している
- ⑨現在は野外で活動する事が多い
- ⑩現在、ファミコンで遊ぶのには興味がない

4. 授業内容について

- ⑯野外活動の楽しみ方が理解できた
- ⑰人と楽しく「遊ぶ」という難しさが理解できた
- ⑱以前より遊び心が身についたような気がする
- ⑲「遊び」の捉え方に変化が見られた
- ⑳自然に対しての知識をもっと勉強したい

の回数はほんの数回で、なつかしさを感じるほど過去において沢山遊び込んでいないということが考えられる。

2) 現在における「遊び」の傾向

この項目は最近の遊びであるが全体的に低い値である。この中で高い値を示したのは⑩「ファミコン・テレビゲームには興味が無い」3.7点で、あまりファミコンなどの遊具では遊んでいない傾向である。しかし、⑨「野外での活動が多い」では、2.2点で非常に低い値であり、屋内での活動が主になっているようである。これに比例し、⑥⑦⑧の項目においても3点以下の値を示し、野外での自然観察といった自然に親しむような活動を積極的には行われていないように推察できる。

3) 授業そのものについて

この項目は今回のレクリエーション指導法の授業評価であるが、全ての項目において高い値を示している。⑪「授業は楽しかったか」では4.6点を示し、⑬「これからの幼児教育者に必要である」、⑭「来年も継続してもらいたい」がそれぞれ4.4点であり、今回の授業受講者は久しぶりに野外へ出て思う存分自然に親しむことができ、このような活動がこれからの幼児教育者に必要である、という裏付けになると考えられる。また、幼児教育者に限らず、心身のリフレッシュという心と身体健康にも、現代の若者には必要であると見ることができよう。

4) 授業内容について

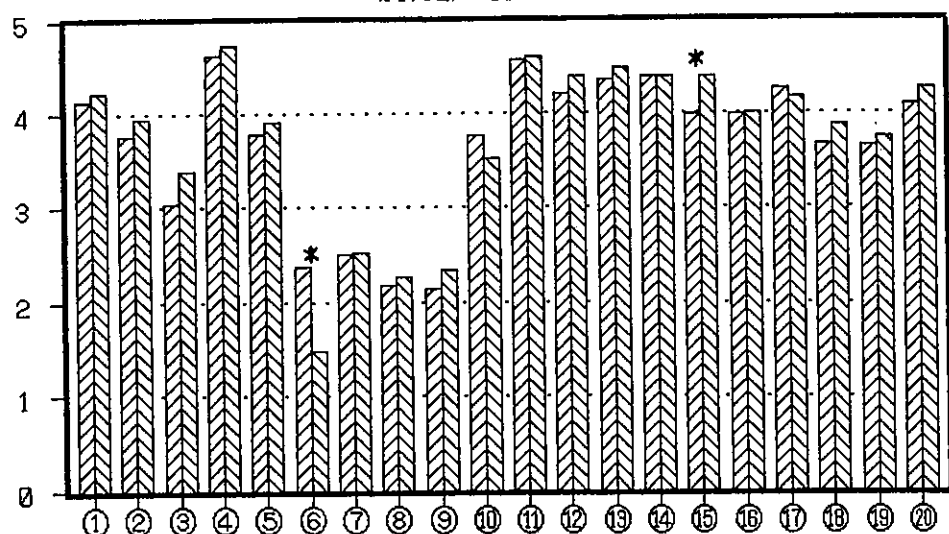
授業内容についての項目であるが、幼児教育学科の学生として最も身に付けさせたい、子ども達と楽しく遊ぶ、遊んでもらうという難しさが、⑰「人と楽しく遊ぶという難しさが理解できた」4.2点の高い値から分かるように、今回の授業を通して学習できたと思われる。最近の学生は、人と人との交わり、コミュニケーションの取り方が下手であり、自己中心型の学生が多く相手の気持ちを考え、楽しく遊んでもらうという部分では無頓着な学生がひと昔より増えてきているが、今回の授業でこの部分の再認識が出来たように思われる。

また、⑱「以前より遊び心が身に付いた」、⑲「遊びの捉え方に変化が見られた」が共に3.7点でそれほど高い値ではないが、着実に「遊び」という概念が前向きに変化してきている。更に、⑳「野外活動の楽しみ方が理解できた」4.0点、㉑「自然に対しての知識をもっと勉強したい」4.2点という高い値から、今回の授業において今まであまり経験のない分野における能力開発が積極的に学生達に行われたと推察される。

5) まとめ

今回の被験者は、昭和52・53年に出生した学生で、幼児期・児童期を昭和55年から62年に過ごしているが、子どもの頃は自然に親しむ遊びは行ってはいるがあまり沢山は遊び込んでいないと見ることができる。また、現在においては野外での自然観察といった自然に親しむような活動は積極的には行われていないようであるが、今回の授業で久しぶりに野外へ出て

図2. 都市部出身者と
農村部出身者の比較



* $P < 0.05$,

▨ 都市部・43名 ▤ 農村部・23名

1. 過去における「遊び」の傾向

- ① 幼少の頃は室内よりも野外で沢山遊んだ
- ② 幼少の頃、野山で遊んだ経験がある
- ③ 今回の活動で、なつかしさを感じた
- ④ 幼少の頃川や河原で遊んだ経験がある
- ⑤ 幼少の頃、ファミコンなどであまり遊ばなかった

3. 授業そのものについて

- ⑪ 今回の授業は楽しかった
- ⑫ 今回の授業で心身のリフレッシュができた
- ⑬ この授業はこれからの幼児教育者に必要である
- ⑭ 来年もこの授業は行ったほうが良い
- ⑮ このような機会があったら、参加してみたい

2. 現在における「遊び」の傾向

- ⑥ 最近、キャンプで一泊以上した経験がある
- ⑦ 自然の中でのびのびと遊んだことがある
- ⑧ 草花、虫などの名称をほぼ理解している
- ⑨ 現在は野外で活動する事が多い
- ⑩ 現在、ファミコンで遊ぶのには興味がない

4. 授業内容について

- ⑯ 野外活動の楽しみ方が理解できた
- ⑰ 人と楽しく「遊ぶ」という難しさが理解できた
- ⑱ 以前より遊び心が身についたような気がする
- ⑲ 「遊び」の捉え方に変化が見られた
- ⑳ 自然に対しての知識をもっと勉強したい

思う存分自然に親しむことができ、学生自身かなり満足できたようである。

また、幼児教育学科の学生として最も身に付けさせたいと考えていた、子ども達と楽しく遊ぶ、という難しさを今回の授業を通して学習できたと思われる。このことから今まであまり経験のない分野において能力開発が学生達に行われたと推察できる。

このような経験は幼児教育者に限らず、心身のリフレッシュという心と身体の健康にも、現代の若者には必要であると見る事ができよう。

2. 都市部出身者(city.以下、C群と略す)と農村部出身者(farm.以下、F群と略す)の比較

図2は、幼児期・児童期を自然環境の少ない都市部で過ごした43名と、自然環境の多い農村部で過ごした23名を2グループに大別し、これを各項目別に平均値をグラフに表したものである。これを各カテゴリー別にt-検定を用いて考察してみた。

1) 過去における「遊び」の傾向

この項目では5項目全てにおいて、C群よりもF群が上回っていた。特に、②「野山で遊んだ経験がある」、③「今回のキャンプでなつかしさを感じた」においては大きな違いが見られたが、統計的差異は確認されなかった。これは自然環境に恵まれている長野県内においても都市部と農村部では、遊びの傾向に若干の違いがあると見る事ができる。

2) 現在における「遊び」の傾向

現在の傾向では過去の傾向と逆転し、5項目中4項目においてC群が上回っている。特に⑥「最近、キャンプで一泊以上した経験がある」においては、 $t=2.33$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.05)$ で統計的に5%水準で有意差が確認されN群よりも、積極的に野外活動を行っている。しかし、この項目は全体的に低い値であるので両者間における議論はあまり妥当性のあるものとは思われない。

3) 授業そのものについて

全てにおいて高い値を示している項目であり、⑪⑫⑬⑭においては殆ど差が見られなかった。しかし、⑮「このような機会があったら、また参加したい」では、 $t=2.16$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.05)$ 統計的に5%水準で有意差が確認されF群が大きく上回っていた。これは、1)の過去における遊びの傾向①～⑤の項目、2)の⑨の項目から分かるように、幼児・児童期における過去の遊びが今回の授業で呼び起こされると同時になつかしさを感じ、次回も機会があったら参加したいという衝動に駆られたものと推察できる。

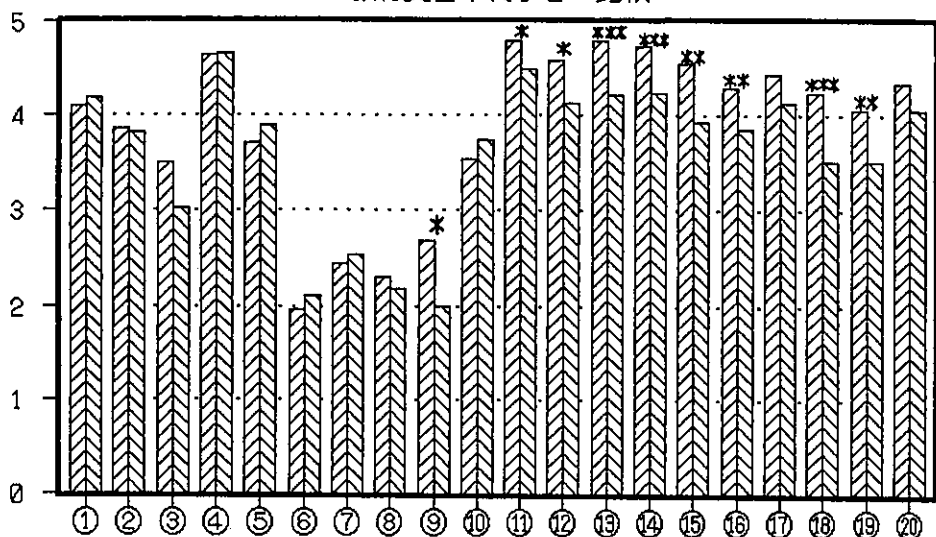
4) 授業内容について

この項目も、全体的に高い値を示しているが、両者間における差は殆ど見られなかった。

5) まとめ

都市部出身者と農村部出身者の比較であるが、過去において(子どもの頃)は農村部出身者が野外で活発に活動していたのに対し、現在では都市部出身者が野外で活発に活動してい

図3. 教育実習終了者と
教育実習未終了者の比較



* $P<0.05$, ** $P<0.01$, *** $P<0.001$.

▨ 実習終了20名 ▨ 実習前・46名

1. 過去における「遊び」の傾向

- ① 幼少の頃は室内よりも野外で沢山遊んだ
- ② 幼少の頃、野山で遊んだ経験がある
- ③ 今回の活動で、なつかしさを感じた
- ④ 幼少の頃川や河原で遊んだ経験がある
- ⑤ 幼少の頃、ファミコンなどであまり遊ばなかった

3. 授業そのものについて

- ⑪ 今回の授業は楽しかった
- ⑫ 今回の授業で心身のリフレッシュができた
- ⑬ この授業はこれからの幼児教育者に必要である
- ⑭ 来年もこの授業は行ったほうが良い
- ⑮ このような機会があったら、参加してみたい

2. 現在における「遊び」の傾向

- ⑥ 最近、キャンプで一泊以上した経験がある
- ⑦ 自然の中でのびのびと遊んだことがある
- ⑧ 草花、虫などの名称をほぼ理解している
- ⑨ 現在は野外で活動する事が多い
- ⑩ 現在、ファミコンで遊ぶのには興味がない

4. 授業内容について

- ⑯ 野外活動の楽しみ方が理解できた
- ⑰ 人と楽しく「遊ぶ」という難しさが理解できた
- ⑱ 以前より遊び心が身についたような気がする
- ⑲ 「遊び」の捉え方に変化が見られた
- ⑳ 自然に対する知識をもっと勉強したい

る傾向にある。

また、授業については両者間において殆ど違いがなかったが、唯一、「このような機会があったら、また参加したい」で統計的に有意差が見られた。これは農村部出身者が、幼児・児童期における過去の遊びが今回の授業で呼び起こされ、次回も機会があったら参加したいという衝動に駆られたものと推察される。

3. 教育実習終了者(after.以下、A群と略す)と未終了者(before.以下、B群と略す)の比較

図3は、平成9年2月～3月にかけて2週間の保育所実習を終了し、多少の幼児教育経験のある20名と、まだ保育所実習を行っていない幼児教育経験の無い46名を2グループに大別し、これを各項目別に平均値をグラフに表したものである。これを各カテゴリー別にt-検定を用いて考察してみた。

1) 過去における「遊び」の傾向

③「今回のキャンプでなつかしさを感じた」においてA群が上回ったが、統計的な差異が確認されるほどではなく、他の4つの項目においても殆ど差は見られなかった。

2) 現在における「遊び」の傾向

⑨「現在はどちらかというと野外で活動する事が多い」の項目において、 $t=2.31$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.05)$ 統計的に5%水準で有意差が確認されA群がB群を上回り、野外で積極的に行動している様子が伺える。他の4つの項目においては殆ど差は見られなかった。

3) 授業そのものについて

5つの項目全てにおいて統計的に有意差が見られ、A群がB群を大きく上回っている。まず、⑪「今回の授業は楽しかった」 $t=2.35$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.05)$ 、⑫「心身のリフレッシュができた」 $t=2.13$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.05)$ 、が共に5%水準で差異が確認された。

また、⑮「このような機会があったらまた参加したい」では、 $t=3.35$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.01)$ 統計的に1%水準で、更に、⑬⑭の「このような授業はこれからの幼児教育者に必要である」

「来年もこの授業は継続したほうが良い」では、 $t=3.92$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.001)$ 、 $t=3.45$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.001)$ で、それぞれ有意水準0.1%により顕著な差異が見られた。同学年で同じ幼児教育の授業を受けてきているにも係わらず何故、このような全ての項目において差が見られたのであろうか。A群は2週間の保育所実習を終了し、幼児教育者としての経験があるが、B群は幼児教育の授業を受けてきてはいるが、実習をまだ行っていないので実際に幼児期の子ども達と直接、接していない為にこのような顕著な差となったと考えられる。

このことからA群は2週間の保育所実習を行い、幼児期の子ども達と直接活動することにより、大学で受けた机の上だけの理論だけでは自分自身の力不足を感じ、今回のレクリエーション指導法の授業の必要性を強く感じとった表れと見ることができる。

4) 授業内容について

この項目も全てにおいてA群がB群を大きく上回り、3項目で統計的に有意差が見られた。⑩「野外活動の楽しみ方が理解できた」 $t=2.71$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.01)$ ⑪「授業前と比べると遊びの捉え方に変化が見られた」 $t=2.89$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.01)$ 、それぞれ1%水準により顕著な差異が見られた。更に⑫「以前より遊び心が身についた気がする」では、 $t=3.58$ 、 $df=64$ 、 $(P<0.001)$ により有意水準0.1%で統計的に大きな差が確認された。

やはりこれも、前述の通りA群が今回のレクリエーション指導法の授業の必要性を強く感じとった表れと見ることができよう。

5) まとめ

教育実習終了者と教育実習未終了者の比較であるが、過去における「遊び」、現在における「遊び」の傾向では殆ど違いは見られなかった。しかし、レクリエーション指導法の授業については、10項目全てにおいて教育実習終了者が上回っており、そのうちの8項目では5%水準以下の統計的な有意差が確認された。

授業を総括的に捉えた設問である「今回の授業は楽しかった」・「心身のリフレッシュができた」の2項目で5%水準、レクリエーション授業内容の本質的な設問である「このような機会があったらまた参加したい」・「野外活動の楽しみ方が理解できた」・「授業前と比べると遊びの捉え方に変化が見られた」の3項目においては1%水準で違いが見られた。更に、保育ニーズと学生ニーズに対応する設問の「このような授業はこれからの幼児教育者に必要である」・「来年もこの授業は継続したほうが良い」・「以前より遊び心が身についた気がする」の3項目では、有意水準0.1%で統計的にも顕著な差異が確認された。

これは、教育実習終了者が2週間の保育所実習を終了し、幼児教育者としての経験があるが、教育実習未終了者は実習をまだ行っていないので実際に幼児期の子ども達と、接しておらずこのような差となったと考えられる。教育実習終了者は保育所実習で子ども達と直接活動することにより、大学で受けた机の上だけの理論だけでは自分自身の力不足を感じ、今回のレクリエーション指導法授業の必要性を強く感じた表れと見ることができる。

[IV] 結論

本研究は、保母養成校の体育実技教材開発を行うことであり、学生ニーズに対応する授業改善・改革の一貫として、レクリエーション指導法の授業を導入した。この授業が保育をめぐる今日の課題に応える授業科目として、社会変化、保育ニーズの多様化に対応できる保母養成校の授業として有効であるかを検討した。その結果、次のことが明らかになった。

1. 全体を通して

今回の被験者は、幼児期・児童期を昭和55年から62年に過ごしているが、この時期は自然に親しむ遊びは多少行っているがあまり沢山は遊び込んでおらず、現在においても野外で

自然に親しむような活動はあまり行われていない。しかし、今回の授業で野外へ出て思う存分自然に親しむことができ、大いに満足できたようである。

また、幼児教育学科の学生として最も身に付けさせたいと考えていた、人に遊びを提示するという難しさを、今回の授業を通して学習できたと思われる。

2. 都市部出身者と農村部出身者の比較

過去において農村部出身者が野外で活発に活動していたのに対し、現在では都市部出身者が野外で活発に活動している傾向が明らかになったが、授業については両者間において殆ど違いはなかった。

3. 教育実習終了者と未終了者の比較

過去における「遊び」、現在における「遊び」の傾向では殆ど違いは見られなかったが、授業内容については、10項目全てにおいて教育実習終了者が上回り、5%水準以下の統計的な有意差が確認された項目が8項目に及んだ。

授業を総括的に捉えた2つの設問で5%水準、レクリエーション授業内容の本質的な3つの設問で1%水準で差が見られ、更に保育ニーズと学生ニーズに対応する3つの設問では、有意水準0.1%で統計的にも顕著な差異が確認された。

以上から、今の学生は環境や社会の構造的変化により過去においても、現在においても、野外での活動や自然観察など、アウトドアにおける活動が少ないため、今回行われた経験のない分野において積極的に学生達的能力開発が行われたと見ることができる。

また、教育実習終了者と教育実習未終了者の間において、レクリエーション授業の総括的、本質的、保育ニーズと学生ニーズの設問からこれほどまでに大きな違いが見られるということは、大学で受けている講義だけでは自分自身の力不足を感じ、このような授業の必要性を強く感じた表れであり、21世紀に向けた保母養成校の教材としてレクリエーション授業は有効であると結論付けられる。

今後更に授業内容の内面的な部分の研究を行うことで、アウトドア活動経験の少ない学生達に、いかにしたら豊かな人間性を身に付けさせられるかを究明していきたい。

引用・参考文献

- 1) 平成9年全国保母養成セミナー第36回研究大会号：全国保母養成協議会：1997.
- 2) 松井三雄：体育測定法、体育の科学社：pp.232-237,1970.

